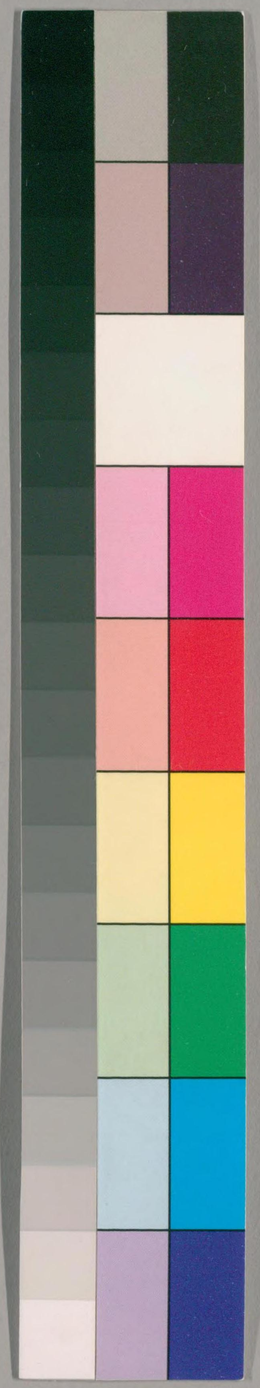
風俗文選犬註解

862
5
67

共五



国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67

ガラス使用

風俗文選犬註解 巻之參

江都 薩甘分我著
玄來

鼠ノ賦 并引

此賦以ヲ五音相通ノ假名字ヲ為ル韻

嵐二の杣人よの名ら居又よめるよめり其いさ称品あり四尺の嵐ら圖ろれ
にしてたちいさき八寸よりて尾山椒の眼小豆の鼻歯ら糸をつ
けて小神ら尾ら末の芽のめろふく如ろ尾をきろて錐のさやとなきさ
脳の色よめてくうすくろこくめ深おせり其行やあまて盗隠る
常ら名ぞ負ふ物ろにくむへきの一つなり乃賦を作りて曰

山の井ろ都て正月八せのつもよかいるるのうち多き称すくを嫁ろ居く
よふふ三ヶ日の外嫁ろ居くいふるるの

光陰通行

明るおろろのうに水し嫁ろ居 其角
書 其角

妻戸を明て出のふ盗ら人目をかん里あるめくとかこちんかなと

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

扇の風よりむすふおもひ草の葉のうらみかいせん二見形伊勢

砂糊の花もきく〳〵やうかるかや小車の枝ろものに狂ふとかの祐成うものひ

つま共枝〳〵みる時月汐上ようかれ女の泪よくもる雲ら雨を

起して吹神をいてゆをさけてまし已の日の板ゆめての誓(ナカヒ)をさうむ加

我川やく瀬よりけて足ろ〳〵くれ色そスワトレトとよくおそいたる〳〵す

くちりん枝の下ようる獄(ヒサ)となろ〳〵石ろ一おろゆるせとゆるあしてお

ざるそそまのさるなん又愛妓のせきもりめ

とかろかのひ板をやもる声ハ涼草の中をこれハ狗子草(イヌコクサ)はえ出すしに

をろ〳〵とひろ苅藻(カルモ)の床とうや伏見の里よりる時ろ居の心のう

ち又こひ〳〵とハのくまりで油地獄(ゴクソ)よつきの

嵐るやそなでまむそこかり　共角

引つて小おくるゆるねつくろふ

みる嵐の　をそ　士筆

かとろろ多や祢つくちん

おろ〳〵で穴く俳　引祢つみる　貞徳

嵐とる涅槃乃猫となこうん　吉水

顔ゆて嵐あつる　秋宮の郭　百里

めくんとうゆよ嵐の時あ外　貞佐

梅ろろ手祢つくろの髪のくろむ　立志

くようハ嵐ら引ける事　るの女

菓子の様よかく嵐うふ　西崖

蛙うくろ嵐の足うさよちろ　共角

松〳〵あくまの事ろ嵐の郭　正忠

二月嵐の穴をふさく〳〵ろ〳〵をおそろは

足のうらの土(キン)おけり(ヒ)油をのむ世の酒ひとり

栗をつく〳〵笹をそこなふはよいハ(ヒ)大事(タイシ)をかむ(ホ)ふれハ虫をけす(ヘ)あやし

ろ〳〵き物をつくて　涼平

入道の世のそろうて物さあ〳〵のさ

御色そるるの尾ろ嵐の栗をつくて

あやしき菓をつくて　涼平盛喜記　十六

占文のさだめ平家のめつぼの端相あくりく迷ふ人通の覚をさくいへ
平家都よ安堵すくいにたりるをさとりまきよくのをるをさとりまき嵐よ巣をつくせみをうまのせうまてにてこく上もうされハまのやの方よりあひすきことひよりて千の南のうち
おいすら平家の御相を都のみよ迷ひ歩すくき端おこさるれ
和名抄鼠穴居の小獣類多きのうち
晋書を大康四年會稽の蛤蜊及蟹皆化て鼠となるとそう
行をなつくりて侍くつめよりもられいにすえでもまるに代の掌相となめる
神佛のそるきを尿糞よ汚し奉る草の根をそむ風の嵐ら俗成々の假ふ之ふ
侍人を風雪をいとうの文をそう書を焚ら泰の代天下の書を焚ふう
我ものむ牛の根をそむ風をとおよ八月のうち
あくうえのそのをよさくくの風きのふちうよ
つくくはりあやうきをおもく夫人のかくときやうか本懐をまきく吹矢をやうみ
糯をめうて往来るものやうれ(ヌ)けいき城をふのむうる
都のう穴をうのうて老のうつむ愁する(ネ)くく(ノ)拆をう障るのうり早業ほ

うり瀬るるおのの神よめくそいう五の忌ひを子まん(ム)虚死て仕合く東坡う
袋を迎ふうる生捕まそるまるに張湯う文をうけるん(ム)或ら鉢を頸よさみく
児童のあるのうとうり或ら筆の用よ彩をぬうて
盈嵐とあるつくれ如ん嵐と笑いま(ヒ)さくよ吹矢をよくくるみそ人の為よそよろこれ
ぬる(ム)あさくかのきを焼嵐とうて狐狸の命とうむそ還ふうれ(ム)
東坡う銭ふ高坡うものそるめるお銭を童子よ拾ふる画なそのくくをみハ
るあるつひむくる之け一族人生のそうるさまを嵐の上よかきうて文をそせ
り生捕と八生うく取をつふ捕うすくて穀(コロス)の意るれい生捕ようふうり
豹の色を取摩のるるを取描の嵐をとる城をとるおそとる筋の意より
紫氷巻二 張湯巧詭(カウキ) 張湯幼
とうれ父母うて湯をむちつ湯嵐のうち
つこの法をおきまう嵐をそうつけるよくくる
つくく油のそるきをおもくりよみの時あるれて位目いやくそれ(ム)百姓のかしきる
甲そなを迎て年の歳(ト)あるものふそし(ム)あ玉の春を加(ム)れハみのの時賀あり
初春ノ日 小杉川ふ日松 公事根元ふ

二井の頼豪っ千足のいきひすっな毒を返るの巻

千秋十一月 上子　田亂化して詠る春

亂のかた空ハ迷異記ま亂ま亂とあり亂の嫁入ら寛永の比の狂哥

兵部ま有て今ま此女のまてあそひま其つあり

福の神まやをせうん　ちる部

御祖ノ今下大宛年遅ノ神まのりたまふく須佐能男ノ命の孫根ノ堅

例のまままてよかのみたまのみとにまあらしう其くむすめ

みくのまた〳〵須佐能男命のみ子にまして

須勢理毘賣　生えてまのくひし

にいくうき神まるきつとまをこハ葦原色許男といふ神まてのくうひてやそようひの其蛇の

室ま入て寝ませき其ま妻ま須勢理毘賣命ノ詞ま

このさつけそのりくまふ〳〵其蛇くうんとせいけ比礼を三なふりて打拂

ひうまてとのりくまふかんをしくのこくしまつまふ

一故こやすく祢ていそくまひきまて来るのおいむかての室

むかくくみ辺ま出てみのまするとそおをくりる也 朱雀院 園城院ニ

条院うその此時ま此おひうみる也やまうまんやま院のみの日さそりひる

八寛平二年二月十二日のまへ路ら此車なりし紫花近くまて止皇ち

ひるめまんくう尼右のたいけ此まま衣まうま幅のたこまう

け慢をくめくおをひとと拙らくう紀物おひう格破ま

やうのものを奉るくく和歌を献り其時の席者を平の業盛ま

ま祭といふいふれの長者の傳へる 八 かくの日本の歌うもあめ 九 海ま

のかけ左うふなまこと海嵐とかくも 十 秋風の尾花のまま書ま書ふ詠ハ四嵐ら

化一る也 十一 為目五のくきおいふちとるめり 十二 象といる歌すっかつ恐懼める

麝香嵐をつくくる住なれてことまま行ら 十三 かつぎ次女のまやうるハ婚入の隊を

らこまま、 十四 とこのこまを七郎とハやハ 十五 我ま為といさうやきすてのまるこ千 十六

大祓くお祓く 十七 時さ此日嵐と名のり月くまよ 十八 誰うあようとう

くうん 十九 すまる出了福の神よやをせうん 二十 狐うかれ里ハいつのうとうやむさし

此の嵐究よや出ハの境の嵐ら 二十一 せきうまる 二十二 信濃の果

かうめのせをむきまる 二十三 とう 二十四 んまるをおいざる 二十五 窮嵐かくて猫をかむ志あうくる

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67
ガラス使用

なおいれぬひしをむかで蛸の比礼をさつけてさきの鈴をふり吟鏡をちかづけ申にいまだ喜矢をとゝしめのみかん共つゝよへまゝ時よするいちやもて其ふをやきめくりつゝよいてんおを寄さるに嵐素てのひらへ肉へかりくかすぶくかくつゐゆゑよそこをふるへ蔭入うかゝしるよやけるめぬそこに其袴つゐみかのうりかゝらをくひかちいてきてゐてやつくり其夫の服らその嵐のみそるほるうき

三井の頼豪ら子足の勢ひ

白河の院皇子まゐ（ライガウ）三井寺乃實相房頼豪あまうゐ作せて皇子（からく）障誕のいのりあ寄ゐれ頼豪よ賞をのそむへきよう勅かくて皇子み物出産ますくれ山門乃定あとし三井寺よ戒檀を建ゝきよーヤ出つれゝ山門乃我をくちて勅許ゐりれ頼豪ゐんめーて山明あれいこそあな憑ゝ叶ゐ称て飲食をとゝめてゐ坊よ入て行ひ祈り出まり皇子をとりろへ悪霊敵なの嵐とゐて山門の聖教を

くひやゐれこれ頼豪ら怨霊（おん）ゐりとて止下ろかとそ井戸ぶこに入ゐれゐくゐ嵐ゐくり出ゐてをひさしんゐゐゐいふ事なけゐ寄ゐゐあれ怨霊をゐさむへくよそ称つゐのふこそをつくりていひをゐあそ嵐ゐ

みの吟や月の嵐乃 完ゐくし 止章

年一おきぐりおくし 日の嵐 嵐雪

嵐

亭の朝かのうに 白嵐 琴風

卯の花子陣ちあるきやめ嵐 部行

梅を花と違ふ春ある事もあぬ事のふの心よ

花よあぬ 嵐の巣 翁

春ると声ゐるかな 巣の称つを

まゐふらん苗代とろ乃 田の嵐 永花

頼豪ら弁のふつくありまり 許六

信る楽

売嵐

雪のうちの老嵐をんもこんつけきつんつけきつんつろしる
かせ咄よかせ法師よかせん咄よかせ

毛詩曰　人之無禮亦如レ嵐　不レ如二速死

花つく集るのせつる嵐の説ら風一体者ゝてるよふるゝ
よりかくゝくて文意ゆうれいふ全文をあく

嵐くふるよて多よかるあゝ居て人をゑまゝ足のうらよ疵
おけらゝ山椒の眼小豆の異歯を多をつけて小袖をゆうく
事ら本の事のめくつよ似うち地芝をくらくゝをかむ
口毒あり尾ゆて雖のそやとるくゝふるてんゝ智賊の色るめてく
うすくるところ深出せり被うあふりうる染のあやうるら嫁入乃
陰そらるるん筆の用よ聲をぬるゝゝ老ての後の梅うかんこせ
のうらつよるゝ八盆嵐るれいうるくゝつりくゝ咄分のつくつるをおる
へ八油を呑ゆ世の酒よひゝんゝ多をかるゝ八はをよくるゝ酔ふりをそひ雪を
つくゝ多をかるゝ八はをよくるゝ酔ふりをそひ雪を
まるる加ゝよ為をちゝて男せの中をとさるくけあやき當を

つくて深平の乱とうぬ行を語てう信人のくあゝまりれいつにゆめ
てう書をやくせの宰相とうふ多ゝ神佛の愛きる尿かう妻よ行すみ
地獄落ゝのくるみ多てもくるやり月日の嵐とゆみるそやくうの加
らるんつくゝ加の貴きをおもへ斗を形あく嵐う心猫りれる
下座よ立う百姿のかくまる甲子を迫て年の男を院のふ春ち
かつるねひよまの日の祝賀ありうそやりん唐の大
和の歌るゆ山法海ふやうゆのかけよすむ納嵐秋風の尾花う赤の
嵐るう残秋の人を雷嵐と傳へ作る齋香嵐うまめ大のつくよう
外よ行ひ天井嵐を雷とうとこのこあを七郎とい弥蔦と名多る八
月代剃てのるやく大祓うふ日嵐月くゝ二のるをくみ訪く
サの扇の骨身誰う歌よとうつくゝ白嵐糸りて福の神のつくひ
せんもろれひくゝ咄るあやうきをおる人かけくゝき城をそのんてこる
とる離をあせて諫うあしゝ我をうまうふ馬よようんとて
空よおとろれいてあゝき姿をやゝ番をなめ吹矢よあくゝるいて
るるものハあゝひゝ吹嵐め比嵐とうのちよゝつゝ或う鉄を頭よかけ

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

旅乃眠 并引

此眠寺由ある寒き八甲路記行とてお文あるゆゑ

風狂の旅の眠 并小序

五拾年の行脚は一點の雞もかくれなき氏八幡の逆旅は皆不平の上乃流浪のうき旅ながらも風雅のさうひを出ては方古の情を述ふる我風雲の客るゝ二十四ある時ら不破清見の明月は鞍をあけ士峯の雲に顔をあふくる五畿もむさし上野を見て碓井の雪をふみ木曾路の谷ふかく入日吉なる東西南北も奔走するの余せて十一年朝夕ともする通ひ甲斐の猿橋をわたり山のさゝすゝの川音のうさに枕をおさんと打下る先達の記行をひもときて宿の和歌古戦場の由来をくめて旅行の袋よりとくめ足袋はきの破を補ひ弁当のふしをおひて杖の上よりかけうち我むつまじき別れ行未おのつから心をきめるゆゑの一声を尋ぬる

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

ら江月庵を尋ねやて帝よりやく人迹を已に甫遠(カトテ)をすゝめ給ふ
ふの武江の館を退

　　和の春も半毛の羽も乃ち
白く乃文章ハちめる記行よりつて筆とるむ料名ゐとろくの日も
おほくハ翁の集より出ハいられをとらひ志うあれと旅の情のを分きを
あつめ多ふ乃仁賦つり旅すく翁のまこゝろをくみ
送る今のつてよりれハ元吋のかゝみは一列よりれをとるす

旅ら風雅の花風雅ハ過客の線西行宗祇の人おら号誹諧の情より
西行るゆかりつの賦又西行の贊よりの引に小鯵ひろあつて
昔宗祇の描ゝ人ゆとて山嵩よ立よりつるの裏のつゝであるゝな
　さするあよ連歌の良とろよ鍋いつ村上天皇ゆ製
　代ゝふるさとてしれのやくもとろう
　せくふるも　さゝち　しれのやとうの時　後村上院ゆ製
　　世よふるもさゝよしれのやとうの時　宗祇
　　せふふるもさゝよ宗祇のやうゝ

同一枝をよ折ハ則り人我こう時　貞徳
宗祇の旧室といふるハ宗祇法師と同一枝をよ折ハ則り人我こう時
一句をゆる也宗祇ら生涯旅してかまれ
我翁白川の田植ゑを少初め奥羽の旨をめ
るゝあつゝ山の夕源ゝよ次浦を詠め佐渡よ渡ゝふ天の川よ初秋の往
をふるまより蛤の二見を経て七る三十余程を吟(ウタ)ふ号良ら蓑(ミノ)の力量
を尽(カン)て一鉢をうて風流をつくさる

奥の細道　　里かみ山ら

　　刺旅てくろおかみ山ら
ふるハの合氏ゝて独立命といふ号良
ふの字を助ゝ此る松島ふ海の詠めとゝよせんるをよろこひ且ゝ
祇の雑(サイ)といくろゝと旅立暁墨をか一巻五と
改て宗悟ら伝て里ゑ山のあり
号良ハ服を通て伊勢の出立ゝ
　　荻の号良

とかきおきそうひうち寄しあるもの俤（おもかげ）髪（はつ）亮（あきら）の別て雪さまざまの虫

くさむらや土なき浮葉心ぐし　笠の露　翁

大垣の庄より入ハる夜も伊賀より寿（ことぶき）命（いのち）を越つるもの有ときゝて如行（じょこう）入

一日芭蕉をくさき綿の新種よりつゝ時つゝ菜っるもめよ喜ぶ其風雅よくうの俗諺をもあつめ狂賊五徳（ごとく）なる

ものの細工の草まくらの類よりあつ

源流のはやあや奥乃細道（おくのほそみち）

早苗とるよりとやむうたの人招

陸奥福島飯山の村よ麻布石あり土人の説よあるへのつる皆偽（いつわり）

きのふの山よ草庵をむすびて住ん母あり家まゝくて世をわたるなかさ

かり沉痾（ちんあ）俗毫のみきうよ石あるにに千種のかゝちを石の雪ありて丹

青のおよびて深く細布（ほそぬの）にうすき説（ときのう）綾服（あやはた）呉服（くれはの）の衣といふる

一其草のかたち参差（しんし）とみくれんるもの

つゝ一せのくこんを翌（あす）よ價（あたい）かつて共代（ともしろ）ものを油（あぶら）して母を養（やしな）

るをよろこひぬるさり星霜（せいそう）きめれ石水中よりあらわれて綾の

紋らうせめんとる者ら已の形と共よ今に朽やうに山里の田ま

寄うる石の功をしるし侍りて石の西を書のまゝて磨（とぎ）けいるさ人の

かけんえ侍るものいつの昔ようもんうはしる人をきゝひけくうみそ

春の時よいくん都師（みやこし）とうくもも書て書の字をとめて石を磨（とぎ）

すむる者すくん浪里の戦料田の黄

ん名よ三十人余のかゝ者よおうせてるとう池の中へ押倒（おしたふ）しるん山

のあやうおのある故にやる細工（ほそく）水中へ伏（ふせ）ます其後自然（しぜん）と

水絶て其砌（そのみぎり）て石の像（かたち）おうらはき水の流（ながれ）て返（かえる）おもうらは

ことに細布を深るゝゝるうものや

旅十体の句八菊阿全集よ旅十体の句とあり

八体の句ゝて七句あり今十体の句とあるハ

かゝし四句と七句とをあはせて後の句

旅乃奥まの深川　許六

やくるやまくら迄らの油あけ

涌雲て旅商い　去来

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67
ガラス使用

五月雨やまさ餅の大井川
同房八作　松尾宗房
秋や須磨須磨や秋しる青日紙
貝寄る風の手くしや和歌の浦
行春や鳥なきぬくりの峯山伏
星合の中や絶なん竜田川
松島や雲の白地の衣配
鶏の子鳴かはしる雛子の聲
八郎や天のはし立てゝの一

万子丸
柳もえしやあちこちはしめ艸枕旅出く居て一つもひて
仏光日人の物へありきくる跡は京の庭はなれつゝ柳も見けるに
見せとて旅行しくる旅の宿を帰るといへり
旅人ちもりもろくともすきともやく一筆旅山のをちら
俗以盗曰須利(スリ)蓋笓麗(スリ)ハ竹筐(カコテ)以為行旅之具若盛(モハトキハ)水物

竊(ヒソカニ)渡(ワタリテ)去而笓麗(スリ)乾(カハク)ク辟(タトフ)ニ之竊(セツ)盗(トウ)ニ

早苗とる我もくわきる叔母か　萩
奥州へこしのみち
冥ら泊の絆く旅宿をその細書に記す　宗因
旅宿のさま上段は書院床銀菱のすゝし火の囲炉裏火燵にやくらかけてつりの
入湯桶かけふけて居る底は小桶のさ流るハ根ゐての桶をいぶし出女の空燈
ハ春秋をさら根た板数ハ落てすみへ遍き所へ天井復ハ雨もりぬきハ
つきく鉄行燈らくらく紙をもむ風の心といつくるに焼く銭貫草鞋賣つよせ
ちぎれ金くは枕をかいふけ心よきに寝入たまゐるさしの声は宿を発る出立ち
七ツといひあくるに旅人ゐも亭主もよく寝てあをの所てあさめしつくもなく
大夜の寝あらまほしくる　宗一ゟ邪
らつれの上をいそぎ郡所の前つくしをとり加る荷ひてをとこきすさしとつゝみ
合一僕の姉よさらるを我あ足し朝の明かるにつれの男をおこし朝行と
てねたそを見さと柳とし入湯の一番にへさゝうらふ何ゐるそやつくあら
よ思のはやくとおよ　世話やきのあるにあきくる旅の宿といつも此情よ

かるくち

油通の賣物は餘酒のなきをもつて磨針峠の餅を
王のおそれをもつて寒天を
茶屋飯のおかずにそえる八見付の
旅立ちぬれば筒をかけ
行くものくるものそれ

ふかけ子春の霞 梅や

舟川の土手の桜の情 おくれ
入おのが草のたらるるよと首
鳴田冬谷の賊なり水の浅深を
天竜の中の瀬を一人足を
て行あぐるものの八百九なるなして舟
し娘の情也る土地(ところ)紀(き)奥(おく)を軽重(かるおも)
まをやしなふ一生を漂(ただよ)く飄(ひるがへ)ることする
も玄多のあしきも格のすぐれて蝦(あり)の都よいくる

空寒(そらさむ)つつじ 汁かけて男(おとこ)ぶりある土のめ
吸売(すひうり)るものうちもるもの銭を草の穴よ
てうせの商(あきな)ひもうて世よあるべのことをふ
るハ世をあるく道のるく

生(いき)もせかつり 顔やと

雪渡の山のちるみよい家長法師の記行を
大永四年六月十六日不二のあらわ
筆をむかしより名物十景をいふ一枝
ふ

末松や 秋の風 其角
十夜(じふや)なる女(をんな)郷(さと)なるの 許六
十夜(じふや)くハめもまめるの
郷(さと)のようなる雪(ゆき)まの畑(はた)をおて
己(おの)が世(よ)を尋(たづね)てくるしき雪(ゆき)のふ
春三月(さんぐわつ)をぬくもんのやま 路通

長崎を御ゆかけよ十三子　相葉
雪の朝　暁くる程やすこし寒き　宗因
ふるごとのうるさくもあり雪の暮　る行
極月十日西山宗因亭にて
いそうでも足袋雪くる雪の暮　其角
外飛つるも鮮くふの白い十夜哉
杉なる十つすくいせ旅くるくるひるもろうせうとする旅宿にて一句を
おせうふ拙なるものの色ともやえ徳のこころ人の世のすきるよ乃
さあるるくるよや今の十夜哉
名物のかくさあるかいるものの十夜哉
る依て其ことをいふもの　白化のかるるものの
てての春すて其外くさくのものを
野長明海道記　園部の里をすぎてるにひ宇ほの山よかる
こら山するをもするかえ山うるのもるう碧岸のかるか
るうして客を立翠嶺の上よ宇ほ
ひ西を眺よいくきてやうくよのるれ行眉祖の肌多よ流れて草衣う
まあといてる懐中の硯をまのうう加て徹風の拙お可るうく
十團子　闇齋
大極十團圓　都来是一貫　今此粉團子　誰成茂叔看
一二三四五　六七八九十　貴得天地數　無過無不及
遠加天竜川を西行發心集よあ
那可という長明う海道記る天中川をわるをあり
よりさうハ多を浮まてわるうんあまくつるの中川の水　長明
異聞集　淳于棼酔て夢入大槐安国王曰吾南阿郡屈郷
為守れ二十載使者迎出穴逐ニ宮語ニ古槐下蟻穴乃チ槐安
国又一穴上南枝就ニ即南阿郡也
流浪漂泊の止よそあらんるるめられ独坊生るをおを
加る同一あるとめ此ま用るのあしみられの多るる情ほきある
ら長拾くさき布るうてめるるものを焼火るあぶるあるハ二室義神
といふものよ志ろ谷て志くく足を休めと極めの札ゐるう送おろ

さゝて都てのつねおよう股をすくめあ方のよ社を推乃てあゆむてるるをゝ人る病死の到来ハ時ゝまつ醫療のこゝろけくゝ懐中のふう藥をふせく急病をふせく巡礼乞卸して日るる財寶よ退きるも老僧のあられみてつゝに入おろくおさるう綿よ黄泉のゝよ趙くかゝて伺ふの土とるの一ゝむ後をきゝ大はうの中にこゝて年のよ以衣類のよやうを小れなきるまて行ふのいるる人といふ房もきゝるうかるう園部のけ堂の辺堂の笠よ経文をよみて回行の別を情ゝすゝ川の念佛を尋て我子のお墳よのふう今来古往の人旅懐の情をつゝて風雅の腸をさゝ以能囲ら白川の歌をよみて二なみちのくよおもむき不二都るのふ自をりゝめてすゝやに故ゝかる者ら良室老人なう東海道の一節よきゝる人風雅よおるつるといそれ〳〵哥の声耳の底よとゝまる

能囲ら白川のゝゝ

都をハるとたる出ゝゝと秋はそゝ白川の実
けるゝを我心るよくまよみゝゝ多哥よあるゝ

けるゝを世の中よ出さんるすゝ多ふうとおるひて人よもきゝ以そう
こゝう西て願の為を思くせんとて日毎日よあそうるゝとてのち陸奥
へ修行よ出てよみるよ一ふのそうの歌を拾集さゝ以
巳ふ集みちのくに修行してまうりるに白川のせきよとまりて両柄
よやつるのゝも月おすゝ行くあられて能囲ら秋風をふくやりん
おりいるるんとおかの出らるて名所多くおるゝりふい実ふのはし
らよかゝつけゝる

白川のせきやを月のもる影ら人の心をとめるこゝう　西行

不二都るの二句　安原貞室　初名正章　一嚢軒とゆ

そらゝくゝとも其年東行てみこるをなす

室芳ねんて以るを以ゝう嵯峨の鮎ゝひる都　るる

いさの名ハ嵯峨の鮎ゝひる都
跡の月ハみよしの雲や不二の雪

自ふおよらく章をゆゝとゝ以三章を以て余芳を焼と歎息するゝゝゝ

宇治の山十景之内　園

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67

ガラス使用

ありつゝ千つ旅や袖の雨　去来

神さびし花の
はるあやうの月朧にそそて山の根ひくきる上に雛をうる水里
いまさ野ゆきの民牡牧う早行の鈴のそるなかおとおそ
るるよおそ妙なる日をしく柔のうう
古詩　馬上續残夢ヲ　不知二朝日ノ昇一
古き連歌に　　句ふのかけるまくあ山もや
　　教出く行くく秋ふる　るもの上
桃華ふ　のそうの月よ
賈島詩　遊子猶行二於殘月一
　　宇津山
坂道ノ弁　降　是早天　羅山子
此山無　限西行カ壽　能　使二詠歌一千古傳上

揚揮豆の賦

毛紈

赤小豆の能よく一に倦よく行ものあるの俳者を敢そ春の鄒よ疫をの
を畏しそ今疫のいまも思ふほらくことのこ
りそうる春そ初そて萩の花とめさんそ
饅頭の唐額めくはそアとよりそ
もいつの地涙更とい理屈人の名つけこ
無藁　尊よ居臣の義をつくし七歩の詩い兄弟
不死汁の名らいつれの店を時よそまる由緒をきくれみあやおの弁よ
かのうち張敖の弟よつかうもかれ帝の一つの遊うう嫌うれ大きる
きこれ時きく遠なれいたまにすく
に奏うめるいうなる小豆なのはなる
そつ春の鄒うえやこそのそき
四月十五日鄒の木鄒社　註かを楚あまりしあそちいさなきる
とそうらく袖よかくおて女の屍を打るいるうこれるあらう

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

つる女ろくむくいう小豆粥祝ふ　加賀ほら紅調粥
饅頭の唐顔めく　まんぢうハ長まるものを東鑑ニ建長寺のるをといへるごとくに十字とあり十字を紙ニ書すと切ハちぎるの縁訳を十文字ニ入て四つニわるやうにするを十字のとハいふ
謎もちよもち　古ニ所謂廋詞（とうし）（カクシコトバ）即今之隠語所謂謎也
卿野代酔編
用之字謎云一月復一月両月共ニ半辺
七歩之詩　曹子建
煮豆燃豆萁豆在釜中泣本是同根生相煮何ノ太タ急ナル
イトヨ意ら今もする竿牛房人参などを入て小豆とたゝき煮る汁也
不死汁々不死ら竿堂をふるとらふいつまでかるとも小豆よの汁ろう
あやおの外よかるあよ　あやおハ落（こぼ）るろう
賊人つくること合
月えつくることハ　叔下のこゝろこの外のおの声のすみつろう

今あやおの外とハふあやおハ落るもえよ外ろ故也
文操　上署　　陳素
かい豚ノ説
花もよ外の菓子の桃ろるにおひめくろうる和よ例の小豆を
ゑられハ花のかたちよ似るよりにおひめくろうる和よ例の小豆を
の内裡上臈ろ萩の花よつるをよのかたちよ拵れハ和白のろろひよりて宮城野ともいつ
ろしすてハ一体の別名ろて雑煮の芋よある時ハ隣ろろるろ名ハ伊勢の
萩ハ初冉よつろよ山寺よいさるりれてそろの和尚の
ろてろるに山伏の者ろををゆく
かのかいつもちよて拵しハさろるろよ
大炊頭　大炊粥　十一月廿四日　傳教大師のつよ
且つ日ハ小豆粥のろつろを招斜よ入初ろの本を中よさ一入基ろの柳よ
作ろ式ろ下さ多よおろてまくろ
臘ハ粥　ろろを小豆粥を拵ろよ　十二月ハ　出山佛の日也

張鼓の事よつゝゝ　倭漢三才圖會

非鼓　申鼓　うつつみハ鼓の事也　ちいさく其柄をもちてこれをうち
もゝゝつゝゝしき小鼓ゝゝくれを手うちの之ゝゝるゝ俗ゝゝひ一あゝ
鼓のちいさくつゝふ　古く鼓と書しゝゝら今の世の大鼓のことを今う鼓
いゝものハ大鼓の中の一種ゝう和名抄に大鼓と有ゝ今の大鼓ゝりせ
の中の大鼓といふものハ左のつゝみ也今ゝ世ゝ大鼓といふ物ハ
おほつゝみのうへ猿樂ゝ大鼓小鼓といふものあゝを八今のせゝらゝ
つゝみの中の大ふるいゝゝ名のかゝり也　摺鼓ハスリつゝと　鼓
鼓ハフリつゝミ腰鼓ハ三ノ一ゝ又クレつゝミ今呉の樂ゝ用ゝるゝう鉦鼓
鞨鼓ゝとゝゝゝるゝ和名ゝ一都ゝ美ハ都曇の字の音也　唐書
礼樂、天竺伎、都曇鼓ありゝう白孔六帖ゝ都曇答臘ハ本夷ゝ
樂ゝう都曇ハ腰鼓ゝよ似て小ゝう答臘ゝ蜡鼓なりトゝレといふ
ゝゝゝ

かるく又もろかるくと和名抄にあるに
ふくろ万葉にかまくらふくろ
神樂竈を於比乃つくどに
つくつくとあそびすゝしくえるよ
枕冊子に豊竈をつくりあり

學來 陸方祝竈

陸奥方者至于今有仁恩眼目最炊竈神形見子方
再拜受座家有黄牛因テ以テ祝之自是家至巨富

堅田の蜜の舟よ年をかさねと食の橋のもとに
くゝ鳥の巣のつくるなるおのれくゝと生ひたゝ
む蕨の士を運び蟻の塔をくみて四根の梅をくゝり
くゝひくゝで病鶏の啀をこのむ鳳凰の威
かゝんをよろこぶ山姫の逸物の麝を吹上ても心くるくゝ一日の室町と
おもひて移ふる蝸牛の釜お前むとせつまれてい
蛇の貝の掌造化栄螺のふたの左をつゝぬ仮活うき風雅の友入礼貧乏主

奇居虫の家をとりすれて例の衣裳の雪の合よとやされてくるむの
堅田の蜜の舟よ年をかさねと食の橋のもとに
くゝ鳥の巣のつくるなるおのれくゝと生ひたゝ
堅田の蜜のふたを皆よりみをくゝひくゝで
ふくろのくゝひくゝで病鶏の啀をこのむ
今の世迄もかくゝあるよ

四愛堂 梅 外 菜 菊

林逋孤山に隠居して梅を愛す又詩一双を詞ありて雲よ入る
鶴よ伴ふ林甫常よ小舟を浮めて西湖の諸寺よ遊ぶあり客
来る時ハ童子鶴を笑て鶴を舞さるゝやうて林甫舟を棹さして帰る
舟の動くを客の帰るとしるしとなん

衆芳搖落独暄妍 占ヲ断芳情向小園
疎影横斜水清浅 暗香浮動月黄昏
霜禽欲下先偸眼 粉蝶如知合断魂
不須檀板共金樽 二十有二徴吟一可二相伸一

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

九多のあそびけりをくんるるを
家来　呂安題鳳
世説曰嵇康與呂安一善毎二相思一千里命駕安後来
値康不在喜字公穆嵇康兄出戸延之不入題門壁二
作鳳ノ字一喜不覺猶以為ヒ称

閑居ノ賦

潘安仁

廬山の雨の初月をきくこゑもせて身のあまこゑもあるよ
や吉野に奥ら住らくくるうきよの世の嵯峨のさうきょう中くに住まろう
ひめ栗栖みくれくの菊酒の図伽梅を柑子の垣よんおとさん宇治
山のかんおまる梅柳の風をつくんと人食太よさまそう花ら一ものの
淵きそらやそ水ととりくの雫をまくふ私ら東籬のかとをめろ
て皆の底をしきらしゃ西籟のさむさを忘んて笠の宣さをりする

蘭者ノ花ノ時　錦帳下　廬山ノ雨ノ夜草庵中

阪村

草　花ら摩よ月ちくまるきをのこるうのふくれ迎
春のゆくるもるも路あうんを
神無月のころ栗栖みといふ
るるる苔の細道をふるて
にうるるく筧の雫うそ、霜
まふのとおちしるさす住人のも
あられよるるとかるこの宿よおきる柏子の木の枝をたれ
生るる雫をきりくかひうし
ゐ〳〵とおゐくる
書記云武内の宿祢悪態玉を
つ枝よ袁を遣坂と名つけろ軍王
てなきうろ血隅れて栗林
迫其栗林の葉をおるみものよ
つゐ草よ人つく牛ら角をきう人ふるハ年をきくてろとす
秋ら東籬のもとに　採ら菊東籬下　悠然見南山

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

茶鼎穏秩のかるるそよ五臓をはらひ一条子皆多のさびしき音ほるるをかへ
くう詩をこ籟のおもむきをさそう歌を山水の風を好むを掬ひ鏡二つ
置三つ琴四五絃を臭の柏子をおのくくて爺のあくそをひすし自利の
自由をはて耳のあやうきをのづる壁一重を市声の喧しきをへてす
れ一枚を車るのおこうを避くう世を捨せよ捨らるるもつるる
るてのくくこそ俗の室居をいかんそ

案牘めうそう隠居の上をつ皆(ホイシン)ぬ(ホイシン)ともよう詩を三籟の趣を荘るを天籟地
て室をもつく綿をつるう詩を三籟の趣を荘るを天籟地
籟人籟のるをつるて天地自然の理利をさとると文意をふく
めくう西行う山水集の風雪と和漢の勢力を取るう千石よか
るうとハ俗の隠者の俗しみう五事等の勝をかめ世をるつ
のしてそ迎隠者の上をのそしみ小人の室居のさまをのるん
彩の文段う
つう草 浮世をはるん者能た箱一つよおきを

室居の雑事 浮世の砌り納豆汁 兵角

今の室居めく者をとるに食よ八珍をつくく酒ふう五味をこうむ指折
の障をみるう四季の花をを彩(イロド)りは月のむ籟ふう花組青の文をちりめ軸よハきれ人形の位置をちくくくき石
よハ水を添へるきみう意をきつく琴三味線のタ、小歌浄瑠理の曙
隣家の祖ふうをさるく行人の足をとむ粉白く黛(マユズミ)翠するもの屋をつく格
子皆多く袖をきるくる廊をめぐる牡丹芍薬はお今をつくく籔鉄海石
に賤をつのをす偏庭を交跡(まじわり)をくぐて奴ぶ
えろを奪ふ或ハ地黄相杭子を植て他るをつくのひみを作り
て八百の店よおひ夕顔の偏庭は隣の生葉(ナリハイ)を洗くて相顙(ひたい)の菓摘(キヨモリ)ふう
銭の等用をきくころうの室居も彼清貧の室居と名を同うせんや
取くんくるありか人室居して不善をうのをハ室居の罪を過るて
分我ひと今の室居めくうのといつふ
かうと取人の言まをかう用ひ室居て不言を
をとぶかくう塗銭のようなるおりて

る老樂心の文作るう今の世ふるのよ
掃花の通をゆてくは教をるのくよ老て世をのがれ其ふをうつみ
教をくよ法をきれ〳〵て其多其通の悉御よるとくて多をる
ふ他をあ〳〵め今銭をむさるりとる者をの〳〵此文政の如くお人家
居〳〵て奢をる〳〵部屋をる代よようせおのれ〳〵ほ居とそ〳〵て隠宅
よ花美をかさうおく人をあつめて酒食よ善ふをつくる〳〵世り
そうをさく〳〵利欲ふふけて笑ひをひく者むかくもみくも
小人の玉居のさま同〳〵うて
琴を秉るもたち〳〵古事記よ天の詔琴(コト)秉(サヅ)あれてゆるとみえ
神代よりありまつ伝るよまれ神の中心を開おて且詔(ミコト)を請(ウケ)ひ
やうるゆゑす琴をひけり附よ其神琴の上よ降(クダ)り来(キ)てくるか
うりてみことのりのふ琴とつふ名を知〳〵河海抄よ和琴(ヤマトゴト)六(ムツ)
特(サナキ)詔(イヒサナヒ)伊弉冉(イザナミ)の尊の出(イデ)ゆくもの
のちよかくよるひめくひの楽笠くさく後(ノチ)まつそ
皇(スメラ)よりとよりあるを八大和琴とい唐琴といふり

抑之のちの八分て琴(キム)のこと箏(サウ)のこと琵琶のことなといふりかく
むかし〳〵迦八仙(カヤト)琴(コト)をも常よ引くもてあそばれるよりの楽笠
の中の最上と定められ〳〵を神代より伝(ツタ)へ来(キタ)りて大皇(スメラ)のめの
なれるよ抑之重ら貴(タフト)しあまりよ深く
秘(カク)てひくへ伝(ツタ)ふることにもあらぬるふつつ
のくつりてりつに神秘(カムサビ)るふこにのこ自ふるよりもあらぬ
くちをしく心もきよきのうしれて伝(ツタ)ふる人ましるのうて
ふかくていやしめすつるといふものをしふ右ふる琵琶(ビワ)あり

三味線　小歌　浄留理
相傳ふ京師よ二人の瞽者(メシヒ)あり嶺神(タカノ)検校沢角(ザツカク)検校といふもの紘歌
をよくく〳〵嘗て出曽子(シソシ)の孫浄留理と兹(コヽ)墓(ハカ)のる路をあふ書十二段を
扇(アフギ)を拍(ウチ)てこれを語る人こゝろてこれを多ふ生佛ら平家のかたりと相(アヒ)あす
るふよ四條東洞院(ヒガシトウヰンノ)歌金工家(ホリモノヤ)何某こゝよ陸奥也旦淡路(アハヂ)の傀儡(クヽツ)をい
ふくし三絃ふ難〳〵うれを和す

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67
ガラス使用

後陽成帝うんを立処より引田演路極よ住す延世綽よ盛也
文選潘安仁閑居賦「窪園鬱」蔬以供二朝夕之膳一
隠居虞仲逸ハ隠居メ放言自ラ中清虚テ中權
和名抄疊和名たゝみ
くゝみつゝ名を重ねるよしのうひろきものをおて狭くおつゝむるを
くゝむといふもおなじかさねるゝゆゑうすきものゝ其疊よ又重あるをいふ長帖短帖狭
帖半帖等帖薄帖帖の字疊と書をかのはし重あるをいふ
書記ニ筐疊八重ハ疊八重 結疊八重
万葉十一 みこもかる稍あむかまえ學こゝる平郡の
牡丹芍藥 芍藥ハ花の容ち婷婷約〻たり故名かほよきとす
草木の類 百花の賦 よくゝくゝ
菜摘 今のゝ ヤマホリイ かな分らう古本よりてきてもりとかふ改

招魂ノ賦 も考

西方に吾身の魂あり行ていつこう恨む魂すやたゞ
瀟湘の旧草よ仁人招て魂を結まとハゝそう恨む事ふ
某門ゟ春の花おもハゝる春ゟ秋の月露ハ人慕
て行んうるまれハまゝ草の住ゟき世の中に仍よ卯の花の垣ゟハよう
んぬ時ゟのふおゝくゝゟ春の雁の絶よかへりまやあむゟくハくゝ
ひいつこゟ行て遅ゟ日なゝむ還事ゟくゝ王孫むかゝら草とおもふ麋
蕪の香ゟやゝ夜よゝうゝむ王のて花落の徒よ出てよゝまゝ久ゟとゝ
かゝゝゝむ魂すゝやゝめかゝうまん

西方乃吾身ハ芭蕉をいふ瀟湘の旧草ゟ幻住庵をさしていふ
ゝゝゝ一ゟのゝくゝまゝのをゟくゝめ中文ゟゝ

王孫 王ニイカウめそう草又つもろうそうゟ
我おゝおゝるつもろう心おもおゝもゝ人のきゝあるよすゝゝある

蘼蕪の香今や夜のゝうゝむ 唐王維カ詩
蘼モ亦王孫莫ノ漠送テ二春香一入中客衣上

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

蘭蕪 一名 當帰

東花坊 ㇾ 日のあるまじけせんよかの蓼まじ切ハ字陸の山道のかそさく月後ハあるべし
称し昔の心もすゝむざれからり豆腐らて表宅の里乃
名ゝあるいそで世の人の風味よあゃゝゝ
はゝく昭陽の秋をうくめる酒さしみうりうり香花ふとさくるゝ魂な
つ還ゝまん魂 行ゝよゝあゝゝゝむさゝ彼やお生の慶のむゝ御ゝん水海ゝと
なゝゝ山さゝゝゝ長峯山乃山さゝゝゝ
時よあらんむまさ北良のる根を入紅の弱ゝ
の秋をよ露て八病屋の旅舞のよ丑多を宿
さゝ八水差の園の名ゝゝゝむゝん鏡山の西
松風の音ゝゝゝこゝゝの園をゝ蓼
八あれと霊神の東のあハで御お魂ゝゝの
あまゝさゝ八風月の情ゝゝゝん地獄ゝゝ
んさゝ八陸地ゝよけの袴ゝて
に地花ゝゝゝを色ゝゝて梅の花の

おゝ世の人の是非のゝゝんむとゝゝんゝゝおと
良蘭ゝゝかゝ園月行ゝ岐山の落居近よ
こせあゝの風雅の裏よおゝゝゝ八ゝゝ
よゝゝゝ魂誰よゝよゝん御ゝゝを
山風蘭ゝるの八巻ゝ六・蓼東ゝ詩よゝ
近江の地ゝゝ湖水・賦よあけゝ
園月ゝ也ゝ生羽ゝ羽ゝの蔡の人也
春ゝ其原洛よのゝ年を越て二月の
當居ようあゝ八塚のすゝゝ草 ゑ

笠日記 出羽羽黒のふとる園月行ゝ吉九四ゝ世の生ゝゝん都の
方を白ゝうてなゝを月日の中ころ
移ておのひめるまにゝるとやかゝて
の秋をゝゝ山路の東花坊ゝ仮居て
花を半ゝゝんゝとゝを考よゝみゝて大和路の行脚すゝきゝとゝゝめ
おもひおゝゝにむ日の中ゝろゝよゝ句ゝまゝて行のすゝきやゝもあゝで

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

二月の二日ふるに雨ふりるやさんいぶ部うつはもうるときまさくあつて書
らつとうめく侍り其翌日あめふつまるまゝ吟侍くん先人をうん
くらみぬく〳〵夫雲水漂泊の者らおりうるをつまゝ思ふると誰く〳〵
おるゝ久其ころをサメ侍く侍るくんとそ多侍るくんとお
ほりしかつて涙るをうりてこゝろをあらんむといつるまゝて此けう
くるゝ〳〵

死よまて哀きさゝきの花の附　支考

序一羽いそぐ都乃土の下　酒堂

土くさき不あらんや春の草　芭蕉

陸奥ちとり　坂田より羽黒山の麓くかくる高町旅人舎あるう
山ふよ芭蕉翁人圃月を庵そ俳士あり四年山お流の土くるぬ其あるう
と尋入を跡をそるゆに相逢てしきく後世登山のお和うかひそ
ら遠国うの弟今くさよりもをくようそるべきあるうよかくと
ゾトよりつめのけての俳談外をくる系節のりと来ひいさらい圏
月の懐四を述んと生をしめてそこに竜のくさまり首よるんかかます

どろわら立茶こゝしき捨石いせ埋を心うき水情のまゝ河
流のさゝひをゝゝさゝき

樹をみをありのまゝ雪乃硬を　枕流
言をみをうつ　　　　　　　　秀荊
釣力数り　　　　　　　　　　則堂
すゝ元ゝる水　　　　　　　　呂風
すゝり納ら六ツ鐘　　　　　　助叟
十ちおの老ゝ驚てをる獣　　　普提
栗らる

むかゝ俳諧ふ詩歌乃信あるといふれて
いつれう信るゝ人と俗をこれをもて世
くるのまんとせる中比ハ俳諧の信あゝ
まゝくるとそり偽あるゝ人ふそれいつゝ
義の要るゝ〳〵今や俳諧ハ信あゝさ
たるまうの跡ふいくはゝもあゝ其あ
此日の魂すゝやっにかつ事ん加ゝゝハ吾為ふ要んゝゝひまゝゝか

うまれ浣誠ヨ㠯りきこれ
諧謔の式ニハ其通の心ハ勿論執筆の
用ふる句法共外くさ〴〵のるゐ㠯て
諧謔の頃、巻之十 詩歌諧謔の辨 巻之九 四文章の註解よつきて
おく〳〵古書よりうつして初そひのこゝろ
念佛興向 興ノ所 作業一趣ニ向ス於彼一 謂ニ之興向一

百鳥ノ譜

霧を伝あのうの也そこゝをゝらくゝ迄
こゝろすゝ目白をすゝこゝいそのく 朱拇
ゑゝや 椿の中をこゝをつゝす 出泉
こゝひすりゐゐあしこゝる 菜細こゝゐ 尾毛

ま 考

白氏文集 池鷺ハ絶句ニ内 陶淵明ヨ遠摩ノ風骨ヲ

鸛 贈ル鸛

君ハ誇ニ名鸛一我ハ名鳥ヲ君ハ相似所 飢来一種 啄ニ睚獰一

鸛 答ル鸛

無ル妨ニ自是一莫ニ相非一清濁各有ル歸鸞鶴鄙ノ中
彩雲ノ裏幾時カ曽テ見 暁啼鳥飛ヌ
陶淵明 姓ハ陶名ハ淵明のちに潜と改字元亮又五柳先生と
傳燈録 達摩大師くゝめおの林ゐ居ゐ九年二祖の為説
法ゐ教てゝ外諸縁をやめ内心あそくゐゝ心牆壁のゆく
ゐて道ニ入ル〳〵 達ハ通也摩ハ大也 達摩ハ通大といふ義ゝり
荘周ゝ夢ゐ胡蝶ゐあそくゐ
昔者荘周夢ニ為ニ胡蝶一栩栩然胡蝶也
時珍曰 蝶ハ蚕の類也某虫ゐ化ス百合の花蜂ゐ化ス本の虫蜂ゐ

化す綵裾等よ化す皆吞ろるみよりてつゐの蚕のゆく羽化するう
如く朽衣物も又虫を生して化すと草木花葉の化するもの則象
化屋化ゐ其色又吞其虫の食ふのそ花実乃ひ化するふの物ゐるも
くうゐり蝶ら鬚くつく我虫ら眉くつく
貧宿のみるるわ山の梵よ衣の傍のはゐめてりてよめくるる
仏をろふまつせくくハおもてる遊慶宗ろそ一物もるく
とよろろんハ返く

一物もろきそろゐる心そそなく

雉子の鳴声ちいとうくきに百矢の数をのれすやあるんといそて一矛よ
くそれの命ゐ断めるハられる韓信ゐ軍の文武をつくさるものるく

雉入海化為蜃　雁入海化為蛤

季立よ雁の子のそを出して雉子のそ方をむさる蜃ハオホハマクリ

韓信ハ淮陰人前漢之功臣蕭何曰至如信国士無双也

ろそ吟さそろく紛ろ　こゐ　万字

年の秋のうけき考ろのつま点よ乙ゐる奥文
かそろそるる雉ゐろそろそる吸者の数をろくてそゐる　西行

蒼鷹ろの人をそこみて眼の肉よあらてうるのる文智をもろそくる心くろ
さそと一羽そ名あるりのハ世のくそれをゆそるる志つる

仁徳記ニ曰く四十三年秋九月天皇酒の居をめして多をそて
曰くれんのそそ酒の居くそくさくさく百姓のくさそを名つけて
傀儡(クヌ)と今の鳶是ゐり

まま集

ゑとつはさもあるめ高をおしてゆちるもそあるくちのやうそ尾
蒼鳶(オホタカ)　鷂(ハイ)　鶻(ハヤブサ)　隼(サシバ)　エフサイ　コノリ
西園寺家　鷂ハはいたうの夫ゐろく
雲客ろの如くの花よすとる秋の菓このう
にやろるもすほるるとをさらん　ゆるろのつろの香る
夕ゆかけ行もさ羽の如くの芝の糸やかけすく
はゐハ附おの香ろ　な羽のめけろをる尾よこめて細て羽のひそひ

[illegible]

あつるを稲負るのを一ツまい人ら負ゐまとハさるまゝ

大和ものがたり 倦るゝ

さのゝ分けていなを負るのゐ比ける小君うゝくとおとひるゝ

頃ゝ和名よハ ニハタキ ニハウナフリ トウキヲヘトリ 今の世人定めゝ

共稲負るて秋毒て秋秋の田よ唱るるまて心ある哥

秋の田乃稲負るものこゝれとも未のまゝ倦ゐ森の雫む

一書ゝ云 ゐる化用の歌として

民の指秋の窓中のるをてゝいるおねせるとくをいひるる赤人

いてゝるの指をいくのりくれる 稲負るのるかてゝする

右のゝくハるるり 坂倉橋太平紀を倍中ゐ

かゝくゝていきゝ新つる山田ゝ山田ゝ稲負るゝゝめてさに集摘

右のゝくハ倦なのゐ哥ゝ 倦るふなひとつゝ

七車 山揚の壁るる校よ猿の二ゝ足ゐ(まゝ)て摩(スヤ)おるる洗のいきゝ

よく着て無ゝとゝるよ負ゐ三つきゝる画よ

日本後記 四十琴 春澄善縄 倍之

桓武天皇 延暦十一ゝ年ヨリ淳和 天皇迄をまる哥ゝ

めんとゝる猿まてておけ 唱るとゝり 其角

唱ゐる説く多ゝしい春のゐとゝ斗心ハへきゝり

己里よゝれをみこいよゝふこるゐ

百ゐる歌ゝ哥ゝ万ゐる

るちゝりまゝつる毛ゝりの毎よあゝまれとゝ系にふつゆく

系つる校のゝりゝむるゐちゝり人来ゐと居をきまゐぬ

又 三鳥傳ゝ 呼る鳥 稲負る 都鳥

ひせまき亀へまゝ来ゝるゝ もゝちゝり 一斗

ゐるるるの中よ山のすゝ岩よあつゆまるるいくちほゝみゝゝ尾もゝみゝ

すむるハ草よかゝれ 林のるハ彩るゐゝつ水るゝ口嘴もゝ尾みゝゝかく

投壺礼記投壺篇に互ひに礼を正しくして酒をのみ楽むまでもなく矢の数多少を定め酒を呑ませ投の字まを提とあり

布数の袴のけつまづき

脱却布袴と唱るあり提胡蘆佰芙酒と唱るあり

越上聞子規

夜入二翠帳一啼盈尊詩

山谷禽語ノ詩注

蜀魂の不如帰と鳴くハ勇猛の声なるゆへ詩にもかくつけるなり東坡の意なるべし

苑希文

樹飛春山無限好猶不如帰

清氏枕冊子 田植る女の謡ふ哥を宗祇

おもしろきおかやつなおもしろきとしまもあるおかやつなおもしろき

時鳥遠く声を聞く

宗長あけぼの物よ八月中ごろ迎附るものよ

りんハ秋冰時の附るものなれども

夕なる附るものハ時を

暁のる吐ら

銃や 磬 ま 踊り 共角

我須广の雲守るらん 宋なる 氷花

栂於る山田ら青し 宋なる 調柳

盈籟よりけく 宋なる 舟竹

かんこる 烟草 美つく 稲花

細う移 枝下

陸奥(ニヨリ)のかくら郭公同し羽の色

仇しかハりめありかんこるを他ると同し附るハおほよ凡二ツ宛

あり春よるに四ツを以て四季の田長とも謂なり

ほとゝぎすを時をかくハ時鳥好音ありとつゝるよりる也

附る者よりそこらをこそ

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67
ガラス使用

諫暇を作りて
俊成卿の吐哺を報ぜし
伐楷乃作歌
秋の雁の江天よりおろす時なるを晩の雲よさけみいろ定めんなるあ
古今注 雁河朔より江南へ行る
おもてるゝ江南八汝饒の地なれハ行ハ
ゝくハ人ゝをおそれ芦のもさ野するをふくみてそこゝけきを
防らよる白氏帖ゟ上虞縣の雁人の為ゟ田を治む春をふくみて
草根をさり秋をつゝみて其けうれをのそく多をみて官より禁して
民屋を害するゟ
特物志ゟ栗を食ゟ羽翼重くなりて飛ゟあゝ
北朴子曰智禽ハ衛盧以避繒繳之
多ひゆく雲井の眤や雁乃声 許六
雁の性陽ゟ来ゟ又陽ゟ去ゟ陽ゟ也

雁帰て後ハ
雁の秋や春ハ
雲ハなる 芭蕉
鷓鴣ゟ鳥をゝすゝめよ吉野ゟ 〃
ゝあるゝ琵琶ゟ多ゟしゝ跡の君をゝ
なゝ同ゟゝあゝゝ同ゟ埋ゟゝ
ゟゝのハえいゝゝ万里の別をゝ
者劍鳥渡海桑王君故事ゟゝおゝ
蒼庭鳥鷓鴣雨紅又紲 鷓鴣憲而入篭
五元集 長さきや源氏ゟ来貢の雁 亭ゟゝ
桐の花秋渡
燕もゆうべまでゝ飼ゟゝ
つゝゝやいそ江湖の宿の一夜二夜にちきり侍て
うゝ本ゟ屋そのちハ兄ゝめ人ゟ
をのゝおゝろんゟ渡ゟ時ゟあゝんかの法師の宿

かゝるとよみつゞけぬるもの孤村の出て夕陽を呼つくせハ誰かあはれの今雪もおくらんとあぢきなきおもひをつゞるもおなじ

弁百物語　中納言いそのかみもろとものことにつゞくめのすゝひらくへつけまとのつゞくをみつゝ行のおもひあんとそのつゞくめのまあ見とゝんぬ

史記三代世表第一云詩傳曰

湯之先爲契無父契母與姊妹浴於玄丘水有燕御（タマヒナキヲ）隨（ヒテ）之契母得故含之誤呑之即生契

天智記云六年筭野郡献白鸛（ツバヒ）一

江湖の傳　雲水行脚の傳をつゞるなり

水つゞるをかゝるをつゞるをおもひつゞるをつゞるをつゞるを

あら磯や
おもひ
おもひ
明ゆく
雲雪
心
月や
雲
方八九百里
地
明
しきり
明
雲
水
胡
文

百花深き處　羅隠詩
不論平地與山夫無限風光盡被占採得百花
成蜜後到頭辛苦為誰甜
百花深き處　羅隠詩
不論平地與山夫無限風光盡被占採得百花
成蜜後到頭辛苦為誰甜

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

食二其母一桂林人取養捕二家鵝一
鵝らるゝといかゞしてか免すべき
吳名也

ふるさとのあくまで土まつ毛うてむしの
巢をさして母をくらふとうり土を化してこゝろ也
誉白集 往さめをとゝまの声のうすものゝ
人いのちゝ涙をおのゝ毛衣のれんやあらんとつまゝ旦くる
せきおのふすまのとき降のくきこゝろをおとろかして
山ふかみけちらすもの音ゝやて物おもろ〳〵きあるの声 西行
書柳のおもるもの三のしらう国のうすものを付て筆の傳、
末ゝやおもひ切くる盃のつゝ 茶境
みつくのうくやまの末のそまる空 月尋
末ゝの源氏ゟ物語ゟ笑へ 江戸
さもそかみつゝ部ゟ 其角
源卓に住るゝ勢ひ其声すゝやにして世をもでかゝる山ゟちゝ水ゟ

遠ゝ里の穂の勢ゝ穂ゟ出てあそこゝる
雲芥れにみ笠ゟ着とめさせ、 許六
夏迅雷着とめさせむせてゝゝ
庭やくゝゝゝ
うのおとひゝ 蛙うゝの
かいすゝみいつゝゝ 芭蕉
石我ゟ方寒集ゟ朝粥ゟうゝゝ顔乃露汁
くゝゝゝれよ羽のゝゟ子をかゝ 琴風
大ゟるすゝゝゝのさゝゝゝ特人の通ゟ迹ゟえゝゝゟを
啄木ゟの飢をちのひゝゝゝ本ゟそひ指をゝゝきあるきて跡のおゝゝ
こゝそゝゝうゟのきゝゝゝゟのれかきうゟき生涯のいゝゝゝ誰もゝあゝきす
多ゝゝやさゝ空山の日影ゟ雲ゟゝて掃ゝのそゝちゝゝに吟乳ゝくゝゝそ此
ゟの声のゝゝ当ゝていさや跡道士ゟあをとゝゝぬ人ゟ仙ゝゝ
かしまゝく掃 柳
木つきの入まゝゝゝ 芭蕉の杖 お卓

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67
ガラス使用

本つまさやをかうのおおひかつらつらつら　太夢

韓昌黎送張道士序

張道士嵩高之有道者通古今學在文武長才一寄跡老子於中一爲道士以養二其親一

本づくの抜一抜ありてものよいかうめるをさし知る好日の結ひ
つくうさ発る障子のかきくもる弁をもて
まくまくあくあいくるるにうれいつくおもくるる蓋
くるのおくに舞ありくるひまをるるかとる
文意ゆるなれい解よなし

軒の雪の晴をよろこびて行のやうすのみさへ
は墓碑の風情すてくの降をうかふあくるの家野を同一まて
をのくうをおくともおもひやたに澱泥のけんをいをせの
よ出て物さかくるとおもふいさぐり悟さくるる
うくるる湖よりうく青雲のふさまあくるむて

古今記　天子崩ずる葬のまをいへ
則そこに霰(ミヤ)をつくて行屋をきせうち捨(スト)
翠(ニケ)をもて食持(ニケ)し崔を確女(カクメ)し
て日八日おハ日をあそひくまき

淮南子　大廈成而燕雀相賀　湯沐具而蜚蝨相吊

かくあや孝ようの
鶏ら墓碑の風情　未不考

屋つるかけのくれ尾の長き物のもをいふ鶏も鳴るあまけ
あまくくをかつけ神場とこよのそもなくうそきく
住ふくをのよいそうに誰も加く

幽冥録　宗ノ處宗常ニ買二一長鳴鶏一著二窓間一後鶏作

人語與二處宗一談　論終日不輟　處宗　因テ此功業大進

世人と葬る者あくて常ら類るとて会
ぬ作て酒香也價をるやうにおもふ

早川よ魚なとかつきあけくるをのれもひるまきゃくあるきゃくあるきる人のまに囲うて返すみくるまをあつまる吐
さてみをめでくしとさめく〳〵世のまおきさせて
一二日おとくなんの寒さ羽の下よりあるをでくと
おのふらさめて名の為なきハなくめくしさくハ十二のものと和名と
るさハ寿をきくる心のいてもなくしん
薬ハはふりまくはふりいすつるまりいの一くさ葉(さて)礼子
ちをつぬきてもちて多数の害ひをを返す馬(トラ)のそ夫(こう)あくまり
つふく草にあくあく寒きも時のくる部山のくう立さくそのく住
くつるまひふくふく
浪そきせをこまくくて人くくく
万葉七 鶏 さまつとう えまくう
まくすむるての杜の根をきくまよおきてけてきせんとうも
神武記 さま法どう鶏明のとも
いさくよ晃

さく浪よ要のいろるさまつとう鶏明のつく浪よかきてやり
おくろくそやうそかるまお鶏明ト 義
置立て鶏の逢のるまお瀬くる 浪化
十二日の声の中ろる鶏巨の卵 本導
風をて近くかけるやふさのまも秋のけきるく定家
駒をくるまつれるくてをつふあのもとるまくくハいたらあん

駒 さくらをとるみさくらる
雪の枝の花笠めひをれハ侍ひしうさくらをとる
まよも八月駒おとく駒をとるを駒おとつるう
ひるの日てめて声をおこさしめ大なを
駒うくも まて明 史邦
かくひのるまおまくる 歌のまり
ちる風晴るいてるめく行く中指のそうにくをおかいそあて雨るまる
志のふるうれされど田雪るうれおて田めるふくとうとたらまをくく

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67
ガラス使用

さるものゝ多くおぶくるもの

行くの中将を来不考
みち栗　何か故ノ涙迎双白鷺
　　先憂頭上赤垂系
髪あるこ湾芹ノ
七夕つくるとつくるの
　　水手歌かくまり　鷺ちまノ年
楚蔓の美八一枝の枕よるき驟山の繋
の花ノ錦帳をこゝせ八李夫人の影
翡翠とつくるハいるる美人の魂よあん
けるるこてみらあし名めてく見を多
まふん名をやより其姿のおるつく警
るゝ世のくのきをるかさるる
楚蔓の美八呉王西施のごる
驟山のちきりハ　長恨歌

驪宮高處入青雲仙樂風飄処々聞　縦ノ歌ノ慢ノ舞ノ
凝絲竹一曲日君王看不足漁陽鼙鼓動地来驚破
霓裳羽衣曲九重城闕煙塵生千乗万騎西南行
翠華揺揺行重ノ貴妃ノ霓裳羽衣の曲を奏むる時鈴山
及道ノ帝城を焚かすめられ蜀ノ方里の雲をくるの
と作ふう　夜雨ノ鈴ノ腸ノ断ノるさるる
杜律五言　桐葉坐ノ題詩翡翠鳴ノ夜析一
翡翠ハ古事記翡翠為御食人　そこをたくよあり
又かはせみとう魚をとるる也　和名ふり
山河のおくの上のかはせみのごとくかけるる時そ移らいれる
そにちよるく青翠すて魚をくくふ沢東平て水狗とつる
かゝせみのふくあ　蓮ヒ　枝はしへ六出
警察　日なのをしるを舞民よこ其
けるる西土の琴峯ハ時よちひろ
年あるるくハ雄時をいふ

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67
ガラス使用

服のうつくしきせんとや　野水
代主のえくぼ中やをしの跡　木節
をしうるの別もあらし　里圃
雪の春ちかめうつりて結ぶ伝馬かな　同
くらひろあるあと風情やおくの
なつまいりろう

雪の　おくの　数うつく　去来
宇久ひすやうつくしう書ふりゆく　通雪
雪のあそびや　おそうそ　如行
雪や　二俣　五合庵の　茶の雪　曲翠

我為の世をさしうる中うも為年貢のいやしよりのいやしくよ
どいあーさつるまく起てお蔵のまのこうとよつまてらえおもひ
る時よう息るとつまるやうる事いくくまくきけにら作るなりうれをる神の
つうひのうちうかるるのいひもせまで

世俗為ら無形の神使我ハ愛宕の神使山王の猿八幡の鳩春

日の暮東山のうさぎ大文の風呂敷つのる足のくくく共神ら仕る
生駒宝

つふく草履虫ちるの大ちの春をるまりるを西行うそて路のおくらんハ行うくる
うそて無後うまうまるを少作るに
垣根の棟ふいつをや縄を引ふうハふ
体や為のむしろ池の堤をとるふハ
ふそ共いみくくお前くくら法ちる為
遊のまうきる我をなうんく

きるのうる花の戦あとよろうう　為
きるの句ま為の作句かやうる作ふくく
羽くくやうるお酒ふひと作く平ハさ
外銭ら自らうるを天狗よるまいくく
作天狗よるまとうふきまるう
杭根ま為のうふう　秋のふ　為

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

あなうるさ〳〵きるよと蝉の声 嵐雪
雲の峯 五童の塔や蓮の花 許六
きるの命なつけそよ山 杉風
日本霊異記 行基大徳詠歌曰
加良酒等伊布於保手簸利能去等手美亭
敝木集 くまもなき月のきよはらそそるものひまゆくそらをおもふ
逍仙窟 あるかくのやもめ鳥そよるかたしくをおそれ分いさこの寝入くるに鳥り
喜俤 おかふくと行かくて暁方の山川つと迷ふよ又上られい盃をとるこゑあまるへ
みしうおや鳥のかうと行るゝ山川
る親おやをそをとよるつれよ菊酔
そつ鳥三つ四つかうハこそろう馬明
るのくと鳥くろむや 壺の春 野明
きるをかこそろする山鳥今ハ那と音ハふる雲忠

九条の宮のごいてきこる事ハ死水の垢をすくり俵る五穀をもめるをつまとうめしてなるまるこ宮のえんかおまろくるハ足ふのなをやるこまこそみよやいとおそろ〳〵
きるまてるもの名よあるまるもの、蘇酪(ソラク)の一名泥滑(テイカツ)々といふ俵ふる行るまとこふるありて声をおしはろうこるやうよ作ふと吟味やく項〳〵かの明そとこふるハかこらこそめるよ
櫃(ヒツ)の底をやそろ〳〵
むこて家なとなきハ米

昔雪山の中に在其命鳥の一身二頭ニ頭常食美菓一欲レ使レ自得安徳一頭使レ生嫉妬之心一而作レ是言一彼常云何食好美菓一我不レ曽得一飡一命取二毒菓一食レ之二頭俱ニ
死盖レ此ニ歟 和迦與提婆一
明々多命々と同し一共命をもつ
世と俟ことこるありて春秋の堺をこふ
るなつらふものいてハからめるさくひまあ

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67

ガラス使用

百花譜

詩

當世の人の花を古人の實ることの時を花實兼備の世あらむ

梅の風骨ある水陸草木の中に似る物なし一陽の氣あるに生涯を物すきるみ風流の

榮ゆく春を知いきを迎る心より桐火のあたゝかなるを優もあく

きのふに飽ける心より一谷著る衣類調なきとあるを見るかけ人

に寄る金ある男うれる墨染のそつなくはつくる男の一言ゟ百年の富貴をかくる情錢の利ゟ利をかさ

やく盛を過る汎生涯住居井朝夕の旭を立

ても能の風流のほゝみて寢めりまさ

まるくて世を終るいくみ回光のかゝる人まを仰

譜一章 草木の花を女乃よ

評しく

江海物ゟ奇怪の草木を尚し植て神農もまろ

韓子曰鳥有百個々者一首重ノ而屈尾ヲ將飲於河一

則必顧乃銜羽飲

世俗の徒ゟ倣ふことをつゝしまるを

佛說六種の鳥 白鵠 孔雀 鸚鵡 舍利 迦陵頻伽

共命

隆鼻鳥ハ天狗のこと

梅十品 紅梅 早梅 消梅 古梅 緑萼梅 百葉相梅 紫萼梅
紅梅 杏梅 臙脂梅 又ある也 四名をのせたり
墨客揮犀 ㋐
紅南大庾山嶺ハ梅の名所なり 山嶺より佛の堂あり 往来の人多くて八壁に題してかきつけたる詩歌いくらも絶ずあり 梅を一本ならず幾列の司あり 梅の任意て植たる 某人の園亭 某氏の別業 などいふ名目あり 梅の木三十ばかりを植つらねたり
㋑
韓(トンテ)侍(ホウナ)郎(レン) 買(タイ)臣(フ)三十樹 清香留(トヨ)與(ノ)雪 中開
きつふうをかきくらす如くの者ども梅の実を賣りつゝ
梅黄(キ)ても賣(ウ)らう
黄山谷詩 含(フレ)香(ン)艶(エンフ)素(スク) 殺(タツ)緑(リヨク)城(ヨウ) 山(サン)礬(ハン)是(ハ)第(ダイ)一(イチ)
梅四賣(ウ) 綿(ワタ)を賣(ウ)る 衣(キ)を賣(ウ)る 麹(コウジ)を賣(ウ)る 肥(コエ)を賣(ウ)る 蒼(ツチ)を賣(ウ)る ひくを賣(ウ)る
本朝にて花と称するものゝ梅ほど中古以来花と称する物も梅ほど

笑花故事 草木の花よく笑ふて人の病をいやす
梅の花を嗅 一首の花を酒 白梅花は嘔吐を止
忍冬花ハ血をやむ 草木の実 八重咲きは実なし
菊花ひらく 遅きをよしとす 八重咲きは実なし
多くハ五まるの五出の花六出にして七
しぐの花連翹の花四ひらまで 山梔子の花のごとし
遅あるハ花の後ほど実のるハよまつ莟あるハ実のそのうへ花
咲あり 夕顔瓢 風の如くひらく 蓮のごとく花と実と同時にきたる
昼五穂あるもまあけうまで 女麻(アサ)を実あるて花
なし

梅うめの
山路の雪
日もうらゝ 梅のさ
霞深くて鶯の 白ひるふ
月ぬるゝ 梅のを
梅うめや 香ゝる 某卜
枝の花 春ふかよくてゐひこう

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

梅盛て室正月の
紅梅といふ花も一段格別の心を動し来
やうて蒼そけ花ひらけてのち日くよおとろく風
ある色をこきまぜ三十もそろる野良の
をつくろふ心地をする

統室集に春の日客人あり
ま紅梅をくりて折ふとそ客根のすゝ老立筆ら
我せこうそふみ人の花の色をそれうん梅とそちめる

返し

あさきそき色をそれ八梅梅ら
紅梅ら娘住する妻
紅梅のなれて住の素さ外
梅や白いきさら
梅ら全盛の頃城ら天晴當風ふおそろる
一ト笑も花るり

梅のちるみよ連句の心はるうつきるを二ツ三ツそろる

さそろこふら山梅梅花梅花梅ハ散咲交の体
山梅ら鼓花のけしきと賞翫そ
梅花ら嶺ら禁ら満山の花らんまんそろをいふ
花の白ハと梅の白ハと混雑すそ八花の白ハ詩歌とまに眺望の
風色を他ふ梅の白ハ目前の素色を他ふ是傳也

白雲や　花ふのまのふ　専吟
木のすくい汁ら勝ちさくらの時　春
鶯のかけ梅をやすや鶯乃声　其角
梅を花の白ふ重ら叶い爛漫そろる白ふあらされハ花の白ふ重ひ
かゝ昔らハ年の花の中梅の白一ふみそろり

梅を西花の他

屋毒の香そかゝる　酔立　正秀
きのふくそ色ら　さくらの恵哉　春

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67
ガラス使用

糸さくら 服一名 咲くらり 糸来

花は桜を生ずる花と桜と一物なり 生ずる色の花ある山の桜と生ずる色の花ある里の桜と生ずる

花衣 花の袖 衣類 花の衆心の花又花の春 花の都 花の類 花の雲 花の吹雪 花の衣 花の雪 花の白妙 花の錦 花の木の花は桜を生ずる

花の發句は脇句 梅 初山吹 なとすべて花の吹 植物生ずる

發句の正花を他の花は取なすとも本意あるべし 花乃賞翫おのく 逍私なり 色々の詞を用ゆる花乃

花千句なとくさ〳〵かるべし 独吟千句なとは名別なり 花千句は四の脇 十枚あり 才 十の脇は各あり 各別の脇句

名所の發句はあるべし

羽黒を花よりあなむらし 雪 正秀

さくらさくや都は 牛の白ひさし 洒堂

里利よさらば籠もらばや 山桜 心底

庄枝を墨染のさくらかな 木口

鈴さくら 春 磬よかるる白ひげ 山川

海棠 唐 ゆる野良の大きまと作る 数ひら 磬よ世の中

猫ごの恋 風と質素 てくるひおし 誠よ香のなき一色のなる

こそ本意なれ

海棠 よかるる 唐 元 海外より来る故よ海棠と名づく

異名 花仙 唐よ 海棠を以てます一とす 詩人最賞翫す

句なき

海棠の花ら満ちり 松乃月 かな

海棠のをりふしを 雨 風 月 共角

睡ふるをいふ字なを海とよめる字なき来歴もなし 一句なこれ

優艶 艶よ句ふりをふくらし 麹町

松のとくるみをうやお留ると かよはて 吟する時ふるやう花や

立のひくさくひよりかしてたつて先達のまつる詞よ

吟心をいさめしめのまる今新さよ新くなり

賈耽著百花譜 以テ海棠ヲ為ニ花中神仙ノ
不生ズ城ノ心ヲ
海棠の新を 悟を 涅槃像 其角
梨花をな妻の傍よ修る妾の如く
人のトよ立るゝ如く
梨ゝ山菜ゝとつゝゝ志ゝ人あのゝり迫き而よゝ實をむすゝ
性空をおゝめ 異名 快菓 杲宗 玉乳 蜜父
扎て本草花をゝてなゝるゝあり實をまてなゝけゝるあり梨栗柿
ゝと実とゝゝ称と實のゝやゝ
季よせ十二月 差ニ栢梨ニかへゝすゝむ 佛名會
内裡ゝ佛名の中次よ修ゝ 酒をゝゝるゝ佛名乃
中次修ゝの咽のかゝきをやめんとて栢梨をゝゝめゝ人の世ゝゝ酒を
のむゝゝむゝ和漢某といふ人撮ゝ栢梨の庫をゝゝあをゝゝ身
ゝゝゝ凡一里地の利をゝゝてゝゝ酒ゝり
更未集 ゝゝゝゝる三世の仏の中のおよをめゝるとすゝめおゝゝん

梨 あゝゝゝとゝゝゝ詞をゝみゝゝゝ
相摸集 おゝゝゝ梨ゝゝるゝ
出ゝする 妾ゝ
ゝの年 すゝめゝゝ

椿ゝ呉あゝの人の年書とむゝゝるゝ娘
家を法の子を婿めるをゝゝ修ゝ
紅粉をもゝめるゝおのよき花ゝゝ

落ゝゝゝ水
ひゝるゝのゝゝ
文の馬ゝ椿ゝ
碓やゝゝゝゝ

万葉一
巨勢山のつゝゝ椿つゝゝ
日本記ゝ椿の油をゝゝてゝゝ
椎ゝお春翔ゝ集きゝ嵩よ出雲のゝをつゝゝ

花椿 春
正秀
利牙
桂士

八重垣山の山中に岩窟あり人をそこなふ事不絶素盞嗚尊往給ひて
もろ〳〵のあやまりてをとゞめ給ふ是を名づけて奇稲田と云又
はるかみなせの社と八重垣の宮と八千代連枝の玉椿あり是陽の
神八千代迄栄給ふ中略しとむすひ給ふ事あれバそ榊ともおめ
出ある八雲立出雲八重垣妻籠に八重垣作るその八重垣を
いなみ八重大神山の岸よまさきくあらんとよめるにさる事
ハまよあらじ

桃を桃奈いやきまろうそ物好風流なる紫色もろこしの
へハ下国のそ八俄に仙境一風を著かさりて生ふる郷ハ嬋娟と咲みそ
ほこる中そ百節小草のあらそ産毛の深きおあらていやしく

孔子家語を

孔子侍坐於魯哀公一設桃具哀公曰請ふ用ヨ仲尼先
飯黍而後嘗桃左右皆掩口失笑公曰黍者黏之也以雪
桃也仲尼對曰丘知之矣黍者五穀之長也祭先王以為上盛
不得入於廟丘聞之君子曰賤

雪貴不聞以貴雪賤今以五穀之長一雪累蔵之下是侵上忽下也
桃をいやきまろうといやめそ古語なるよめるにや

拾芥抄八種唐菓子梅枝桃子餲餬桂心拍餲鰹羅 團子

諺語 新式 正月桃符 桃板 仙木

名をらもろこしよ桃の木の神薬うつさの二神をかきて元日門ゑ
立て凶鬼をふせぐと云

風俗通 東海度朔山在大桃樹蟠屈三千里下有鬱塁神茶
鬱塁神茶兄弟名曰蟠桃

おろち退治のくだりまでもろこし
黄泉ひらかの坂もとよりある桃のみを三つとりてまもちてかの
にのりくゆき者を助けしより如あるもろもろ
青人草のくき苦の諸てそまむ時
豆美命とつゐ名をものひき
桃の凶鬼を退るや日本自然

日酒よ[illegible]
梅よう[illegible]
餅くハめ[illegible]
[illegible]
[illegible]

即五八也　我ゝ我ゝ尾を一八とつゞめ
草を一八とつゞめ水ゝうて火のいぶをよろこぶる祝詞ゝう天井壁井の類也

職人ゝゝ合　三十番

雪の雪ゝゝあゝさゝ　立居のみ俤ゝうの月ゝゝる
ゝゝゝおもしやゝゝまこゝるかせきゝつゝの世の月ゝゝ
たゝゝゝにゝゝゝ

芥子より眉目かくちまで西施が鏡をもて粧ふ
浅世るこの頃、表年心かけぬ男の一念のこらみまでてそと刺を
して居るおろそかに所つとめさするも
けしの花のうつきも風をまくでおる景て俗よつみけし坊主とよる
まつちうくことこそと刺する居こいつる文章の上のまつまる

むらさき乃表のなやけし　雁　許六
一節の細乃くくれ　おの芥子
押合めの先に表そうけしの花　舎羅
咲をやと作ふく芥子のつゆみ　野紅
けし細やはるくく花ひらく　事貨
ひらの表や十ばけしの花　百明
此念入芥子よりこぼらのよくそうろう　両得
浪風よ神ちんとう芥子の誉こそ　路月
自分先者
表時の心あそくよりけしの香　我人

芥子の詞うよりて中七文字よ風俗を古くる八荷今我人等うの
む百のうち世るう花を信る別うと表を故一百のうちう
うくせるくる西ふし風ちくの
ちんつひくそ花のよろき寓自然
うらやむとそのあるうおのおのよろうそう
牡丹あらのぶき花やうくまき女の姿
かきつばさ花や組をろくまり水　許六
八つはしを律をよる牡丹や　牡丹
牡丹形大伊勢う妻を愛
かきつばさ水の影　我
ねくの手の　古来
あやめそよつくる春の日を葬る　雀雲
あやめそよつくる病む人の眉の上　万我
きくる絶の水のうあやめふく

るくろき神のあやめの色　杜色
あをあや刈てかくる夏の日　百明
角ぐみて年のまもりやあやめ草　一境

五月五日　あやめ節
浴南吉祥院村乃田毎の樹あり主人を神といつき
めぐりのあるもつ今日村中牛を飼ふ事なし
そねいそもあやめ草といふ牛をかりてはらふまつ
のうつし稼を推つくまでこれをうまかたといふ
ことなり

同日菖蒲の枕　五月五日お藏入より献之あやめを一束ねに
おくりまけてそれにあやめそくるもの之
永き根を花の枝よかるるまりりるやう
今日のみあやめを添てむすめ子の枕
百合花ハ数茎多く一茎より博多る合鬼百り色うつくしき
一種ありて生得いやき花なりたとくら蝋ハ東
国より来る位なりけれはかく

それつくかけあけ上るつる胆(キモ)をくあるる
娘より八十二三そうろる娘のうろる事ふくむ
あるむくろむくを数百合の花ひとうのあちう向てこうる
そようとハかきうるのよ　素関
ゆうのをあらうなる

合歓の花の葉ありけるハ綠園の中よ植物をかえ益ある女子の
そうろうおやのうろるのありてかくハ植(ウエ)ありうん
ことを得已ず

盆花の解

あるう植ゑとうふ木あり花ふ我ふの手よひる者
をそのしみてそうろうとあるをおるへハおるへ
あるそあるものあるそひハおるへ者(モノ)あるそ
盧生(ロセイ)の栄耀なる壮周(ソウシウ)の机の上の通通なる立身の世の夢
かれハさめて理屈をうつくしくうちとハ極楽ちやさん
まて来のおそそしき鳥羽玉のおを垂うて歩のおのる枕

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

をかこち勿忘乃草をもとめんよすがもなきなどとろ〳〵へくんろる観念のはしめとやいふらん

きんろ若

其下る盆頼の月をさへぎる八廿日過て男をもたぬ女のそゞめきて仕に出るころのようにつまるものあるまゝ

紫陽花も亦白日昭あるうるっ処ゝ

もるゝて無さめてやるゝ

あちさゐや三好こ西る ふつき 野梅

蓮ろろ〳〵きゐまるゐ〳〵たゝくろとゝ

ひそ〳〵ときいやう佛のきて心ゝそおこうるん

周濂渓先生 愛蓮 為花中君子ニ言ヒ蓮如君子ノ清

芳稗 美也

其袋

母を蓮の実をろくむるけ乳房ゟ 風流

打ゐを水へ通ま蓮 うふ 百筐

蓮ハ和名抄ニ其實ハ蓮トあるめくりと実の名也はちすといふ

ま梭(おさ)房より似て實の名あり

本草藕一名水芝荷ハ芙蕖也其根藕蓮ノハヒ蜜ハ莖ノ下ノ白翦也

蓮茎のそひまを くらおちふらんよふ其張の中よおひて

卵の花ら書一名田より附るの来へきこゝろハ必ず咲とおぼくるゝをかしれうの花といふくらを下乃事也

る衣装ま遣き等仕なる女のふとおつれるう行遠ふるよる

く立別まて顔のふともおぼつかくろえ世そや屍默斗りてそれお

ろうる心地そする行方へっかよふ

卵のまひやひろ 茎 拂 許亡

うのもの 卵の附るのくろうる

卵乃花やちいさき家の 巡くめり 雲静

平のもや斗乃 兒あり 暁斗

朝顔の盛すくるきハよき女乃常ら暗のちよ打ふやを土用八寄

かくるゝに雪降るさに打ふし一月のほど教る事日ならずから升引迎くるゝ
ゐるまく空晴きり翁日さし出るに心地よけれお荘ひ衣裝うとあるさ
ゐて不のめきやうるゝ仰ぐう

和泉堺に宗椿としてき書のありしう浮民物語とうたう二十
部目翁の筆にて筆おるのうう空うくるる牡丹花曽拍う
うゐをあらはみく

筆るゝみ心よかけ〳〵ちきうよや打よき海鮒鮓の寿
草庵集　禅のをぬけうるをを翁の花よつけてゐる
たゝ納者干時お将よ十仕う

空ほる世のそるみさをゝ
返〳〵

うさみのむなきかうもおう
朝顔の甕かうて咲よろう　素川
翁ちやセ衣の伽うあるを時　足栖

蘭の花ゝ蝶の羽ゝ薫すと先師の賜ありさかく出〳〵待るこそ無住
人の西新ゐうつくゝゐゝれな先をこされてはを実ていをゝ
おさゝし記行　其日のかるさある茶店よ立よりるにてるといひ
る女あり名よ答ゐせちこのひきあ出りふいかつけ待る

茶の香や　蝶乃翅ゝ薫す　翁

茶ゝ女の香をともむる第一とに阿房宮の賦に煙の斜よ雲の
まこゝゝをゝ撥茶を林大るうといふ
さし草ゝ男のこるゝゝ花うゝゝ女の様ゝ花ゝ心
よう〳〵翁と自ゝ芳〳〵と進南よ出う
孔子見蘭嘆曰夫蘭ゝ當爲王者香一與衆草一伍ゝ乃十
操一

撥琴鼓之歌ニ倚蘭

茶のかをりや　秋牛　桃隣
茶の香や　松かぜて　掃ありく　素友

風仙花といふ花ゝ色もけゝ〳〵くゐ粉鉄醤を荘ひ人の眼を奪る
やうなるまよ撰てゐるへきものあゝゝ本ふつきのいやし

きくハ彼女の名(ナ)にめでゝ史邦
さよ姫のうまうまも
女郎花らいぶくよう女よ母とく我満よ
女郎のこゝろにうつめるうんうちつ秋のほよよめき
かけられくらん々ゝ柄やすくるうんとおもよる物すきそやさりれけ
女郎花といふ物花ますいちとうけとうかて
ろくみてふうさ智いせ髪をおろくてを比丘尼といふうおう
む綿ら女色ますかさうるれハ大象をつるくてよきつふるさくて
男色のかくつまりうる顔ともあくで男女の中ゝうる風俗也此花百花よ
類する象うくて遠霊(ヲセン)のごとくつるハ草宴のあくひとゝ比ますきう堂も
花をひくく笑ますて下系すくるよようめきうる、彼比丘尼のあひとやえむ
ろめておもるはうも女ろなくくよかうう

白兎史邦

草芬や牛よりそてをくみへし　春澄
牛よりる蝶ハ美ますよ　めりも　其角

遍路ゝるくりて嶮峨(ケハ)其の草の名(ナ)立(タチ)よき京流布の一花
うくう女といふ字ハ所着ゝうるハ
何ともなく京田舎の俤にて花の名
いくふうかこつけうる了

文粋　詠女郎花詩

花色如蒸露俗呼為女郎(ヲミナヘシ)
恐ハ悪衰公羽(ワウ)首似霜(シモ)
ひよろくと姿ハ弱けしやめくも
女郎花おくとあれいめくる花
牙を和よくつゝ
牙乃上をいふ志
俗正よ歌うかつ
桔梗ゝ其色よ国をとくろ
草の戸によき娘ゝるくる心地そする
ひくるゝくりよ桔梗ゝ郷

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

花桔梗いとちいさきつぼみの花すきまある桔梗卜う
細工ものなどね桔梗のつかみこみ
萩ちいさき花也さして多きよりて名ありて人のふをこゝう作るなどくさ〳〵作るなり

草庵集　右系を更光吉物語
春のゝの花とや人のとがめんと萩の錦を来てもぬよう

萩の花のにしきよ立よりて
萩の露玉つく〳〵廉の角吉来
伏原やゝ小萩よおれる重いう萩の露李由
草苅よそれか山萩乃添伏吉水
山萩乃添伏吉水
ちるうら萩ちるうら萩ちるうら萩

雪氷の霜をいくしき雲をかつける中より忽然と精霊をつくりなす天地造化の行ひざるあらうと感ぢうとくへ八越後の景のそれにも三国今津富山なる国をいつるまくまおひうけ沢流のある心地をする

三国今津富山なる国本なる

雪菊の隣も ありやいけ大根 許六

雪菊やる万石も雪の底

雪きくへ雪をはらひて笑ふうち 丁由

かんきくやけの一束も細き 百明

冬牡丹のちやんとするたくくたゝ伏見うるし合内せゑさ居形をうくお文くれへ白地の嬢とも傾城とも風俗をそなふ人生方寸の里かくるまちをつくしひさすし拒女の立振舞よ仰られへ女新いうはらふ処と剃しつくむ時とおをさるまいきるうん

事文類集を 窗のふの人他ふする時牡丹一茎をあくへて我盃主にすゑあくへ花枝ふん吉原数事を夏て宴中よりとくしる牡丹

冬牡丹定かくるき 蟹 こう野 尺草

冬牡丹の花の色 東来 解

雪中牡丹 愛花

百くしの八重つむ雪も深見草 九章 くろ政 注草

當世のえろ花色吉人の賞るる嗚呼いうれの時う花賞事倫の世あるん或閑(トカテ)な當時の人情の花よりうるよ心を移うくやまきこうくく此文章まつまくてくしめそ人の再園を動しいうるをいうくぬるあるんおふつうりそやくこれを明しそいくの大通よ脱入さまよ雪てまる ま賞のかくちをいくんの人句難(ヒケン)たようくくすく易き題の歌よのんとおるつくをやくはかたにくちよるへし娘氏の丸顔ちまんちや風俗の俤あう飄(ヒラ)の青さめるる燕(ツバメ)梅のあう額(カホ)下戸上戸ちてくして今様ら先ちをとくくはねやけの梨のおやれるまひのあくまこそ俗俗の賞ちう雪ひるり俗る

まんちやいおかのえ大石神まんちやいうるう

許六自画自賛百花譜のくだり

いさゝかの是非あれども左よあらざる自賛のごとし

なり

當世の人の花すき右人の實るをこゝろざし

あるむ玄圃の次のごとく金霊芝のふつゝとするみきひ頴

人さまざまの繋あり苦しく姥仇の花額を山茶花の伴あり瓢の

青さめくく熟柿のあくく靨下戸上戸のあるごとく迚年

くれんかいやくくいつゝの頴ら出そろひやはかりなはうてあり頭を

そるものもあり亨の梨のごとくおとがひのあるごとくおのく

あり卵の花のごとく多くして大きさ手下也

この花のごとく　ある人の賦あり　如何

こゝろ風情あり　大意をあらはすごとくにして男めのやう風俗

ごとくなる迚眠文あり

山水ノ譜

凡山水を画くに法あり二丈の山よハ一尺の樹一寸の岩よハ豆かたのものを

もて遠くよハ目鼻をかゝず遠樹ハ葉を枝なく遠水波なくて雲と

ひとしかるべし岩ハ三面をえせて通ずるハ二つのよこ皺

を加へて平一と折遠山迚き山とつゞくるハ遠水迚きあとまでも

林木遠きうつの小疎平らて迚きハ曲りたる古木ハ

もあるまじ石の硬一土ハ生する時をあく石ハ

ふ一もうてまハ死をもて四時の変化をあらハし山の俤を

樹海をおよハ寺観楼閣の屋根をかゝず水郷山店のごとくハ酒旗の青

白をひるがへして是王摩詰の山水の賦の法式なり

許六

夫山水天地万物の始盡人胸筋也画先岩木為専一山

石多作磬頭又為二麦面一大谷小谷ノ文理雨皮皺ノ法有木

樛枝梗幹屈節皺皮細裂多瑞分数万状陰陽向背筍條

老嫩或古松垂枝喪木平園遠者踈平水陽々而若結

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67
ガラス使用

爲驚濤怒浪流曲折以至輕波細瀾蒼浪漁人者浩然江湖
思山無雲若無春花山無氣無神無神則不高人家間之柔
人煙也雪中無人烟是法若能辨則知山水之行佛也
画をみるに先ず氣象をとるのちは清濁をわかちまた山水は
もろ〳〵の画をみるに一遠ようてとる〳〵〳〵たゞ人の余意あり
第一法曰走山大樹寸馬豆人第二法曰遠人無目三四五法曰
遠樹無枝縁愛而黒遠山無皺隠々而如眉高雲下霽
六七法曰山腰雲塞石壁泉塞八九法曰樓閣樹塞道路人
塞十十一法曰石看三面路看両岐大谷小谷一筆法石ニ右下畧
芥子園画伝　山水訣

路もかまのしまるおほろ草木のくさまもくさ〳〵霜の
むすぼゝるる軟やうなるおもむきあれとかひろき山のそひえなく
春のすゝ〳〵時のごとに消て又ふゆくけしきさびしくくゝゝ夕の色さか
めるかけさし入るる西のくちいそんかゝるきあるくハむかし〳〵あるん上
の行ゝとのひ〳〵人をゝゝゝやう〳〵山を十五重ゝくあるといひ侍〳〵

やまと山水そかうまあるさんと城ある
地ゝゝる居をゝ〳〵山石水木ゝにゝゝ
みゝゝゝて是其和漢各別のおもむきあるゝ〳〵
かく〳〵れ好ゝあゝくなりの景すゝゝかゝる
ゝゝ九世戸ゝ景等ゝゝてゝゝかゝる〳〵
野龍田ゝ花やうに滋〳〵任吉ハ神ゝゝて西ゝ
六玉川近江八景風雅の上をもて知〳〵唐の
あうこん唐の西湖と十倍せうと和画西湖をそ
の西湖ゝ水おく〳〵人ゝ働ゝ湖ゝあるおいゝ逸人の毎のこゝいゝ世上俗
中洛外のゆゝて此絵を動ちゝ丹青あさやかに彩う黄白細微な
文をもゝ如の類彫ゝ墨を点〳〵傾城の唇ゝ丹を含む其遠近を
ゝゝゝの色紙今丹青ゝゝゝ洛中洛外の景色ゝ全く山水の部ゝ
して遠人の格式ゝ〳〵すゝて画図をよくせんりやうにそれ雑をゝゝ
古人画中の詩詩中の画とゝふゝひみゝるをや世の料理する者魚ゝるを
切ゝゝを知てくゝゝゝ画工ゝかくゝゝをゝゝ知て西ゝきゝゝをゝゝさ

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

なまこうめるうんとつくらやぐーかうー

さるいくの句をすんるすくやうなしし去年のる阿呆の梅花坊に

おうの附くくうるうて物語ー作者よる考う集つるハ仁うー乃相

史楠ふ仙せて作ーんるみとは

梅うるるのつとりのめる山形ら名

梅うるる集をるるてーおうー小るきう上の鼈(かめ)の鵬(つばめ)、

なまくらくしー

をを一件の趣意と註ーひまして

さんしるう其後大津の米売卸亭ふ招ひて

ひやくくと堅をふまして曼おのト、

ハ句ういう江戸作んとやさんう

場所の鈎ひうとるるかうまきるうおのふつまるのおもひ居る

くるるんとや作んハ謎いま考よとかん作ると名ひてのる某

めるうー

画を成すに水墨をおまして筆意を得て落形を写すとろ

して画きるを考くうて画かきるのあんや

詩ハ成無色畫ー画出ー無聲詩ー

洪覺範石門文字禪巻八

宋史作ー八境絶妙ー謂之無声句ー演上人戯余曰道人

能作ー無聲畫ー乎因ー名曰ー謂瀟湘八境ー

芭蕉

卯月十八日許六亭ニ而画かくくー画かくくー

色香ありこうにくの字よりくくー画かくくー

先師芭蕉庵の四季の句をそれ〳〵おくるるくるめてくる事ゟ梨の花の

白めつゝて哀かけよ唐めきさめる人のるるのかうりうて皆

むきよ考くる画の作うをうさうくる考うる称うくく

なーーの花

るの事すゐめて

手作ーるるめ、ゑと見るるるるつさんハけるのかめきて詩ゟ

作ーるとるる眼ゟ作ゟさう仏作をゆて画をうう

しのるるんとつくるるるいくるるのひさうひるいくくるハ称うつ

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67
ガラス使用

此画法むかしより此に画を学ぶ人初心の筆水墨の濃淡を弁ず形をうつし筆意を得るの故なり画一向ならず画法の次第を弁ぜざれば成就しがたし謝諾も甚だ初心のくく古法を離れ自分自発ともに自由を作るものあり其ゆえいひ下せるものみられるなり初心のくく古法をまもりて自由の作意あるべからず謝諾一生を終るも益のなき画法也謝諾なり

終のちかみつ

八公方義持公此殿生の画を先ば故よりはく是を学ぶ

一日此の志をいさめのさまあくる則遠せしめんとのり

明此いつらく賤貧もとよりのさみち官爵みるがごとく一衣一鉢我多き欲てこれを遠来東福寺の僧気韻ありて揚梅を持るるを見給世よいろいろ精舎要ありて甚の地とのん是ぞう欲するあこ那つく今下を奉りて是を伐ん義持公

ありに感しのひとふるよ伐りて是を伐しむ今寺中揚の僧明此八吉山と号し法弟の人也東福寺の大道のきりとるるお筆ふ画を好む大道ふと是をいまもめ作るの絵ふ絵んと欲する能ふ多き於て明此いつらく元道路よ於らるくものの八破屋之今ふ画を以て大道よ於らる是ふよりて破草(ハサウ)謎の号あり一日ふのく大道師の出るをうかひて不動の像を忽ちく作急ち幸ふ得る此おとろきて是を瞰下ふかき時画ひ中ふ史始おとろ出ふ虚ふるのあるひ去てよう師ふ伐りて是をいまもめ

附文銘　揚山伐ふ彦根五老井ふ餘残別あて揚の木彫

八揚山伐ふ彦根五老井ふ餘残別あて揚の木彫
此立より甚ふをくよ此の人物つくりそ
夕立ふ画よかくて風の姿この形　越人
菊咲ふ陰ふ来ふて居ふく路の奥四　嵐雪
狂客会の日路の奥ふ出ん約之ふ　許六

862
67

14236

風俗文選犬註解　巻之三

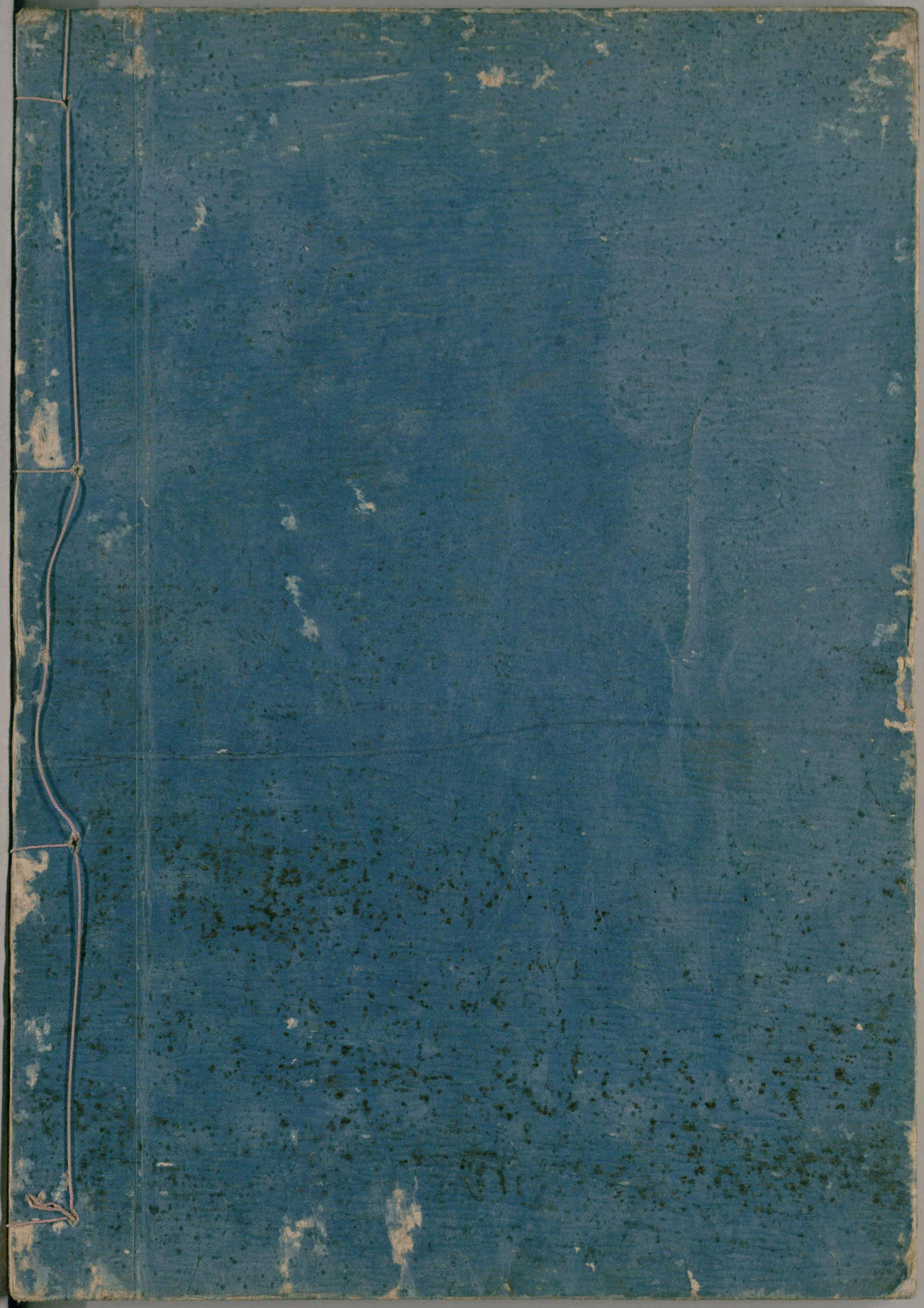
笠よ蓑かつく女　追分踊
けそくまで降をかけそへもる
是ゆふ雲まとゝ
月よ花よ細工貧乏人こゝろ
画賛
唐物よの血をすゝて牡丹かな　李由
画菊
菊もく荅ゝのちるまかもろ　其角

葎甘蔵

肆書

京都　三條通弁屋町　出雲寺文治郎
大坂　心齋橋通博労町　河内屋茂兵衛
江刕彦根　上町　小川九兵衛
同　白壁町　本屋太兵衛
東都日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同　戝丁目　山城屋佐兵衛
芝　神明前　岡田屋嘉七
日本橋通戝丁目　小林新兵衛
本石町　十軒店　大助
淺草茅町戝丁目　須原屋伊八
芝　神明前　和泉屋市兵衛
大傳馬町戝丁目　丁子屋平兵衛
横山町　三丁目　和泉屋金右衛門
同　壹丁目　出雲寺萬治郎
馬喰町　戝丁目　西村屋與八

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67

ガラス使用